

「JST」さくらサイエンスプラン」 日本の若手行政官・研究者ら73名が訪中、先端研究施設を訪問 —— 中国科技部が「中日青年科学技術交流計画訪中団」として招聘 ——

科学技術振興機構(JST)が推進する「日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン…SSP)」に応じ、中国科学技術部が日中科学技術交流をさらに推進するため、10月22日から27日までの日程で、第4期中日青年科学技術交流計画「日本訪中団」として、日本の科学技術分野の研究者と行政官を中国での短期研修に招聘した。

沖村JST上席フェローが訪中団代表となり、訪中団は73名で、内閣府、外務省、文部科学省、農林水産省、経済産業省、国土交通省、厚生労働省、環境省、特許庁、林野庁などの中央省庁、愛知県、岩手県、茨城県、神奈川県、京都府、佐賀県、徳島県、長崎県、広島県、北海道、山口県、川崎市などの地方自治体が多くを占めた。このほか、東京大学、広島大学、理化学研究所などの大学や研究機関の若手研究者



が参加した。本プログラムは今年で3年目を迎えている。日参加するメンバーの多くが初めての訪中である。45歳以下の若手研究者や行政官たち。2016年は78名、17年は107名が参加した。18年は中国科学技術部がさらに力を入



北京大学情報科学技術院での大学紹介



清華大学を訪問する一行

発地区の企業による最新の製品が展示され、各企業が開発した最新の成果に触れる貴重な機会となった。その後、武漢新エネルギー研究院を訪問。同研究院は、武漢市人民政府と華中科学技術大学の共同で、2016年7月に設立された研究機関であり、主に新エネルギー技術の研究開発を行っている。基礎研究の成果を産業化に結びつけるための企業パートナーとの連携状況について研究院から説明を受けた。続いて、烽火科学技術集団有限公司、最後に華中科学技術大学を訪問した。烽火科学技術集団は中国を代表する光通信企業で、

に分けて2回実施し、前年を上回るそれぞれ84名と73名を招聘した。
○プログラムの概要
23日の午前中には、2グループに分かれて、それぞれ中国の名門である清華大学、北京大学を訪問した。各校で大学の概要や学部先進的な取り組みが紹介され、中国における活発な産学連携を概観する良い機会となった。また、研究員による自動運転やナノテク材料に関する具体的な研究紹介を通して、中国の科学技術研究の進展を目の当たりにすることができた。午後に開催された中日青年科学技術関係者交流座談会では、科学技術部、外交関係部、生態環境部、農業農村部、中国科学院国際協力局、国家市场监督管理总局、国家知識財産局の若手高官らが、中国の科学技術政策や日中協力について講演を行った。安倍首相の訪中を間近に控え、さらなる交流の発展に向けて期待の高まるなか、双方による活発な意見交換が行われた。

翌24日には中関村国家自主イノベーション模範区を訪問し、ベンチャー企業が開発した先進的な製品や起業家を育成・支援する施設などを見学。海外企業家の誘致や外国人材のための施設整備などの取り組みが積極的に行われていることも紹介された。同日午後、参加者は北京空港から武漢、合肥の2グループに分かれて移動し、研修が実施された。

○武漢

武漢での1日目となる25日は、まず武漢東湖新技术産業開発区の光谷展示センターを訪問した。同開発区は光産業を中心とした一大ハイテク産業の集積地であり、「中国のオプティカルバレー」と呼ばれ、1991年に国務院に初めて認可された国家級ハイテク区の一つである。センターでは、同開発地区の企業による最新の製品が



光谷展示センター(武漢)視察



中関村サイエンスパークを訪問



中国科学院水生生物研究所訪問



華中科技大学との意見交換

今回の訪中を通じて、中国の政策、体制の下、産学官連携が非常に活発であること、国際化および起業への期待とそのための投資が高まっている現状を認識した。北京はもとより、地方都市である合肥でも施設や展示の規模感を目的、国土という資源と強力な政策による中国の発展の可能性が感じられた。

他の訪問先同様、実用技術の開発、改良への旺盛な意欲を改めて認識した。夕方、上海に移動し、翌日の昼過ぎに浦東空港を出発、帰路についた。

本との連携で研究室が立ち上がった実績やさくらサイエンスプランへの積極的な参加実績など積極的な国際化の取り組みが紹介された。1階の実用化製品群の展示からは、

同社の開発成果、企業としての取り組みの説明があった。華中科技大学では、冒頭、沖村上席フェローより「華中科技大学は、2010年に開始した日中大学フェア&フォーラムに当初から参加頂き、さらに、さくらサイエンスプランに98名もの方々に参加頂いた。武漢地域でも最も協力を頂いており、感謝申し上げます」との挨拶があった。同大学からは日本の研究機関と連携協力した具体的かつ多岐に渡る取り組みについて説明があり、日本から参加した研究者らと意見交換が活発に行われた。

26日には、中国科学院水生生物研究所を訪問した。1954年に上海から武漢に移転してきた機関で、生態環境保護・生物資源利用研究に携わる総合的な研究機関である。同研究所では現在の研究テーマや水環境保護、淡水漁業の研究について説明を受けた。その後、中国科学院武漢植物園を訪問。生物種保存の状況や遺伝資源の保護について説明を受けた。最終日は早朝から武漢空港に移動し、午前発の便で帰路についた。

武漢は人口の1割を学生が占めている躍動感あふれる地域である、という。街中では建

設中の道路や高層ビルの光景が見られ、これからますます発展していく可能性が感じられた。

○合肥
合肥での1日目となる25日には、ハイテク区管理委員会を訪問した。合肥地区は外国企業にとっても魅力的な進出地域となっており、ここに位置するハイテク区も169ののぼる中国のハイテク区の中で、トップグループの規模を誇る。意見交換会では、中国科学技術大学等による数百という活発な起業状況や海外人材を誘致するための環境や投資について紹介され、忌憚のない意見交換が行われた。その後、株式会社科大訊飛(アイフライテック)を訪問。同社は、MITテクノロジレビューによる「2017スマートカンパニー50」において6位にランクされた、中国のAI産業を牽引する企業である。その技術と投資力は中国市場を席巻し、世界にも浸透しつつあることを認識するとともに、音声認識技術と人工知能を組み入れた多様な先端的な技術に触れる機会となった。

26日には、合肥汎用機械研究院および中国科学技術大学先進技術研究院を訪問した。合肥汎用機械研究院は1956年に設立され、圧縮機の基礎、実用、新技術開発とともに、電子機器や空調機など市場製品のテストや認証を行っている。中国科学技術大学は、合肥を代表する高等教育機関であり、清華大学、北京大学に次ぐ名門大学である。同大学にある先進技術研究院で行われた大学の紹介では、留学生や国際共同研究の状況などの積極的な国際化活動とともに、1980、90年代に日本との連携で研究室が立ち上がった実績やさくらサイエンスプランへの積極的な参加実績など積極的な国際化の取り組みが紹介された。